

心理コーディネーターになるために Vol.12

山下桂永子

☆発達検査希望の電話

午前の面談を終えて事務所内に戻り、私が席についた頃合いを見計らい、相談員の A 先生からお声がかかる。A 先生「おつかれさまです山下先生、今大丈夫ですか？」私「はいはい、なんでしょう」A 先生「さっき B 小学校 C さんという子の保護者の方から電話相談がかかってきて対応したんですが。」私「おお。それはお疲れ様です。インテーク申込ですかね？」A 先生「それが、、、発達検査を希望しておられて。うちは検査だけはしてないんですってお伝えしたんですが、懇談で担任の先生から教育センターで取ってもらえるんじゃないかって言われたそうで。」いつもほがらかにこやかな A 先生の顔が曇っている。私「あー。検査希望かあ。担任の先生がねえ、うーん。」苦笑いになる私。



A 先生「初回は面談だけで、検査を取るのかは要相談ということで、一応インテーク申込になりました。お母さん、学校との連携は OK だそうです」それを聞いて即座に電話の受話器を取って B 小学校に電話をかける。時間はお昼時、運が良ければ、支援コーディネーターの D 先生がつかまるはず。D 先生は支援学級担任だから、お昼休みのわずかな時間に折り返してもらえるかもしれない。



☆学校との連携は日常的

心理指導員になった頃は、電話を取るのは慣れていても、学校の先生や連携機関に自分から連絡を取るのはとても緊張したし、気を遣っていたが、最近はどうも気が付けば受話器を握り、電話をかけてしまう。ケース会議などで一度でも会って話をしたら、顔を思い浮かべながら話せるので、電話をするハードルもぐっとさがる。お目当ての先生がご不在でも、(先生は職員室に

いる方がめずらしい)電話を受けてくださった方に「あ、～先生お忙しいですよ、急ぎではないんですが～今日中でどこかお時間ありそうですかね～」と言いつつ、「折り返すように申し伝えますね」の言葉を待つあつかましさまで身につけてしまった。

その後、B小学校の支援コーディネーターの先生から折り返し連絡をいただき、「Cさんは以前から学習面のしんどさだけでなく、落ち着きがなく、友人トラブルが多いので校内委員会で名前があがっている。教育センターで発達検査だけでなく、情緒面のフォローもお願いできればという意味で、担任が保護者にすすめたようだ」とのことだった。

このように、保護者の「発達検査を教育センターでと学校に言われた」という希望は、学校の意図したものとは少し違っていることも多い。最近では支援関係の会議に出たときに、発達検査を保護者にすすめる場合は、その目的によって教育センターだけでなく、医療も選択肢に入れていただくことや、上司から学校園管理職の会議において、学校として教育センターをすすめるときには、校内会議にかけて、できれば保護者の許可を得たうえで学校から情報を添えて紹介してほしい旨を伝えてもらっている。



☆発達検査はいちげんさんお断り

私が勤める教育センターでは、発達検査だけの要望は基本的にお断りしている。継続的な相談の中で、必要に応じて実施することはあるが、発達検査や心理検査だけを希望しての教育相談申し込みに応じることはしていない。医療での診断や投薬のための検査とは違い、教育相談における検査などのアセスメントは、あくまで子どもへの理解を深め、保護者や学校が、その児童生徒への関わりを考える参考にするためのものであり、相談員がそのことを一緒に考えていくためのツールの1つに過ぎない。



しかし、保護者にしてみれば、何かしら学校園で困っていて、何とかしたいけれど、どうしたらいいのかわからない。何かしら手立てを見つけたい。ヒントが欲しい。もしかしたら発達に問題があるのかも。担任の先生に相談したら、教育センターで発達検査をとってもらえるらしい。教育センター？聞いたこともない。先生に言われて不安でいっぱい連絡をしてみたら、発達検査だけはやっていないと断られてしまうわけであるから、傷つくだろうし、やり場のない怒りを電話越しにぶつけてこられる方もいる。

発達検査を取るだけでは問題解決にはならないし、なぜ取るのか、何に困っていて何が知りたいのかを丁寧に聴いて、発達検査を取ることのメリットデメリットを知った上で実施しなければならないのだが、そのことを、発達検査を取ってもらえると思って連絡をしてくる保護者に説明するのはいつも一苦勞である。

☆検査のコスト

忘れてならないのが、心理・発達検査にはかなりのコストがかかるということである。検査道具が一つ 10～20 万かかるのはざらだし、記録用紙だけで一人分 1000 円近くする検査もある。お金だけでなく、時間と労力もかかる。検査も一つではなく、複数の心理、発達検査のテストバッテリーを組んで実施することも多い。それを、最近で



こそ検査に関する研修費用を一部経費として認められるようになってきたが、地道に研鑽と勉強、練習を重ねた相談員が1人の子どもに対して1～2時間かけて実施し、数時間かけて分析、所見を書き、保護者、場合によって子どもにも来てもらってフィードバック面接を実施し、学校の担任や支援コーディネーターにも教育センターに来てもらってフィードバックする。それを、教育センター全体で年間 3000 回を超える教育相談面接数をこなしながらやらなければならない。

これを行政サービスとして無料でやっているのだから、無限にやるというわけにもいかない。相談員だけでなく、忙しい生活や仕事の中で、子どもや保護者、学校の先生にも何度も教育センターに足を運んでもらわなければならないのでそれも負担がかかる。個人的には、これほどコストがかからなければ、正直もっと検査を

やりたい。心理検査も発達検査もやればやるほど奥深く、子どもとのやりとりそのものにもいろいろな発見と気づきある。発達検査などは子どもと一緒に 1～2時間いろんな問題に取り組むわけだから、関係性も深まるし、もはやそれそのものがセラピーなんじゃないかとも思っている。

だからこそやるからにはなんとしてもお役に立てていただきたいのだ。検査を取ることで、保護者や先生がどう子どもに関わればよいのかのヒントや希望が見えるように。子ども自身も自分を振り返り、どうすればいいのかを一緒に考える中で、少し苦しくなくなったり、少し楽しくなったりするように。

